

研究プロジェクト成果報告書（一般研究・特別研究）

研究課題

「特別支援教育における多職種連携に基づく個別の教育支援計画作成・支援会議の実践的検討－多職種との連携による学習会を通して－」

研究期間 平成30年度～平成31年度（令和元年度）

研究組織		
氏名	所属・職名（専門）	役割分担
藤井 和子	臨床・健康教育学系・准教授 （障害児指導法）	研究代表者 全体の統括 研究計画の策定・実施・データ分析・評価
笠原 芳隆	臨床・健康教育学系・教授 （障害児指導法）	研究分担者 研究計画の策定・実施・評価
八島 猛	臨床・健康教育学系・准教授 （障害児心理学）	研究分担者 研究計画の策定・実施・評価
池田 吉史	臨床・健康教育学系・准教授 （障害児心理学）	研究分担者 研究計画の策定・実施・評価
佐藤ゆかり	自然・生活教育学系・准教授 （教科教育学（家庭））	研究分担者 研究計画の策定・実施・評価
留目 宏美	自然・生活教育学系・准教授 （養護教育学）	研究分担者 研究計画の策定・実施・評価
平澤 則子	新潟県立看護大学・教授(地域看護学)	研究協力者 研究計画の策定・実施・評価
野口 裕子	新潟県立看護大学・助教(地域看護学)	研究協力者 研究計画の策定・実施・評価
永井 弘子	上越市こども発達支援センター・所長	研究協力者 研究計画の策定・実施・評価
岩脇 勉	新潟県立柏崎特別支援学校・教諭	研究協力者 研究計画の策定・実施・評価
今井 賢一	新潟県立高田特別支援学校・教諭	研究協力者 研究計画の策定・実施・評価
引場 陽子	妙高市立中央小学校・教諭	研究協力者 研究計画の策定・実施・データ分析・評価
横田 恵	特別支援教育コース M3 j295270p	研究協力者 研究計画の策定・実施・データ分析・評価
高地 朋美	特別支援教育コース M2 (現職)j305255k	研究協力者 研究計画の策定・実施・データ分析・評価

研究成果

I 研究成果の概要

はじめに

本研究では、平成27年12月、中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」を受け、学校が「心理職や福祉職、学校事務職といった各分野の専門家が、教員と連携して働く場として再定義され」（佐久間,2017）ていることを踏まえ、教員養成段階及び現職研修において多職種連携の学修を位置づけることが求められている実態を背景に実施したものである。

上越には、「チーム医療」の実績を有する新潟県立看護大学があることに着目した。新潟県立看護大学や地域の多職種専門家との学習会の実践を通して、参加者が多職種連携を考究し、障害のある子どもたちの教育環境の改善を図る協働の関係性の形成を期待した。

学校の教員、医療・福祉・工学の専門家といった多職種による学習会を実施するプロセスにおいて、障害のある児童生徒の教育に関する研究及び教育現場における多職種とのネットワークが形成されたことである。成果の還元について以下に示した。

1. 学校現場や授業、地域への研究成果の還元について

学習会を実施していくプロセスにおいて、以下が新たに実践され、既に成果が還元された。学習会を通して出会った関係者が、新たに構想し、実施していった研究、研修、学習環境の整備が、今年度までに進められた。

- ①看護大学及びNPO法人親子の未来を支える会との共同研究
- ②多職種連携による特別支援学校における校内研究会の開催
- ③NPO法人親子の未来を支える会と上越教育大学との共催による講演会の開催
- ④特別支援学校における医療的ケア児の学習会環境整備
- ⑤研究代表者の校内支援会議への参画
- ⑥上越市共生まちづくり課及び上越市社会福祉協議会との連携による「福祉コラボ」「教育コラボ」の開催及び学習会の開催

学校の教員、医療・福祉・工学の専門家といった多職種による学習会を実施し、多職種による意見交換の場を設定したことで、学習会の参加者がその後つながり、教育現場の課題を解決する同僚性が築かれたのではないかと考えられた。

また、学習会の一つとして、映画「道草」の上映会を実施した。本映画は、重度の知的障害がある人の暮らしを描いたドキュメンタリー映画である。授業科目「知的障害教育課程指導法（自立活動指導論）」「特別支援教育と自立活動」の受講者及び学内の希望者を対象に開催し、障害のある人々の暮らしについて学習する機会を設けた。

地域の教員や学校への影響、院生の感想等から、教員養成大学として、院生、現職教員、地域の関連機関との学習会の場を設定することの重要性が示唆された。

1)学校現場及び地域への還元

学習会後の学校の変化として、医療的ケア児の学習環境整備について、教員が主体的に学校長に相談を行ったり、学部を越えて医ケアを必要とする生徒の学習環境の実態を把握しようとする教員の行動がみられた。これらの変化は、まずは、校内において高度な医療的ケアにかかわる基礎的な知識を得ることが必要であるとして、県立看護大学の北村千章氏を講師に2019年4月に校内研修を実施することにつながり、さ

らに、多職種との連携による高度な医療的ケアを要する児童生徒の学習環境の整備の実現につなげるという動きに発展した。これは、新潟県はもちろんのこと他県においても例がほとんどない画期的なことであった。

これらの具体的な変化から、学習会の実施は、参加者の多職種協働に関わる意識に影響を与えたのではないかと考えられた。

また、本学習会を実施して当事者や他の専門家とつながることにより、多職種協働による校内支援会議の場に本研究代表者が出席することが実現された。支援会議の持ち方に関する課題があることが検討され、改善につながるとともに、来年度からも本研究代表者が出席することとなった。

2) 授業への還元

院生が学習会に参加することにより、多職種連携の必要性に関する意識が高まり、以下の研究等の実施につながった。

① 院生主体による医療的ケア児の教育に関する研究の実施

（「医療的ケア児を担任する教員における健康に関する学校体制づくりの意識」）

② 院生主体による学習会の構想・準備・実施（2020年2月8日実施の学習会）

③ 障害のある児童生徒の教育課程に関する授業の改善

2. 研究成果の発表

1) 学会等における発表

① 日本特殊教育学会第57回大会（2019年9月21日）にて発表（別紙）

「医療的ケア児を担任する教員における健康に関する学校体制づくりの意識」 高地朋見・藤井和子

② 臨床教科教育学会主催 第18回臨床教科教育学セミナー2019にて発表（別紙）

「高度な医療的ケア児に対する就学支援の実際～保護者の付き添いなく学校で人工呼吸器管理を実施した過程～」

②は、共同研究者である看護大学教員及びNPO法人親子の未来を支える会による研究発表である。

2) 上越教育大学との共催による講演会の開催

平成31年度赤い羽根福祉基金 講演会 高度な医療的ケア児に対する先駆的な就学支援の実際
令和2年1月11日（土） 10:00～12:00 上越教育大学 講義棟302教室

II 学習会

学習会実施の背景

「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」（答申）

教員養成段階及び現職研修において多職種連携の学修を位置づけることが重要
特別支援教育では、

障害の重度・重複化、多様化により、地域における医療、福祉、労働などの関係者と協働した課題解決を図ることの重要性が増している。

↓

個別の教育支援計画の作成と活用への着目

個別の教育支援計画とは

2003（平成15）年文部科学省「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」において、特別支援教育を支える仕組みとして、①特別支援教育コーディネーター ②個別の教育支援計画 ③広域特別支援連携協議会 が提起された。個別の教育支援計画は、そのうちの一つである。

特別支援教育が基本理念として掲げる、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた取り組みを支援するためには、成長と共に変化するニーズに応じて、教育、医療、福祉等の多職種が連携して支援を行う必要がある。また、それは長期的視点に立った、一貫性のあるものであることが肝要であることから、個別の教育支援計画をいかに作成していくかが重要である。

先行研究においては、宮内(2018)は、「個別の教育支援計画とは、障害児のニーズと保護者の希望を踏まえながら、学校が中心となって医療・福祉等の関係機関と連携しながら作成する長期計画である。そこには、支援の方針、内容、方法および評価方法が記述される。その内容は学校間ではもちろんのこと、保護者や地域、そして学外の関係機関で共有することによって支援の連続性を担保することができる。定期的に評価し、見直していくことによって児童生徒の今のニーズに最適化できる。」としている。また、安藤(2010)は、個別の教育支援計画は、障害のある子どもを生涯にわたって支援する観点から、一人ひとりのニーズを把握して、医療・福祉等の関係者・機関の連携による適切な教育的支援を効果的に行うために作成されるものであり、その作成・実施・評価における中核的な要素として、関係者・機関の連携が挙げられると述べている。

そこで、本研究では、「連携」に着目することとした。連携は多義的であり、どう捉えるかが重要である。「連携」を検討していく際、以下の課題を挙げた。

- ・各学校では、個別の教育支援計画作成(地域を基盤とした関係者と連携しながら作成するもの)において、どのように連携を行っているのか
- ・地域の関係者の協働の場である支援会議の実施状況と課題（医療・福祉・教育の場で）
- ・すべての支援計画のベースとなる「障害のある子どもの実態把握」をどのように行い、各機関で共有を図っているか
- ・複数の機関を利用している子どもは、一人の子どもに複数の支援計画が作成される。保護者は、複数の支援計画を活用し、将来を展望して子育てができてきているのだろうか
- ・子ども本人は、複数の支援計画を活用し、将来を展望して学校で学習活動を行うことができてきているのだろうか
- ・子どもの発達の支援に関与する専門家は、各専門家等との連携をどのように捉えているのか
- ・生きる力を育成する学校は、他職種との連携を活用し、その子どもに必要な教育課程を編成できているのだろうか

学習会の実施にあたって、研究協力者に対し、多職種連携及び個別の教育支援計画作成の実態について予備調査を実施した。

その結果、個別の教育支援計画を作成する上で、学校の教職員が他職種と連携することが求められているが、他職種を知らない、他職種の専門性を知らないという実態が浮かび上がってきた。そこで、まず、多職種を理解し、多職種とのつながりを形成することを意図した学習会を実施することにした。

1. 第1回学習会

日時：平成30年10月20日 13:00～15:00

会場：上越教育大学 人204

講師：早川竜生氏、坂井麻里子、小林文子氏

独立行政法人国立病院機構新潟病院こどもとおとなのための医療センターリハビリ
テーション科作業療法士

参加者：29名（病院関係者、小学校教員、特別支援学校教員、療育関係者、市教育委員会指導主事、院生）

学校との連携実績のある作業療法士を講師にお招きし、作業療法の子どもの理解の視点や支援の実態について、専門的な知識の提供を受けるとともに、多職種連携のあり方について助言を受けるとした。作業療法士は、発達障害のある子どもを対象に、幼児期から感覚統合訓練、コミュニケーション指導、日常生活動作の訓練を行い、学校入学への移行がスムーズに行われるよう支援している。学校側としては、幼児期からの支援を引き継いでいくことが重要になる。

3名の作業療法士から、病院における障害児者への支援の実態及び学校との連携の実態について話題提供をいただいた。学習会参加者は、就学前幼児発達支援機関指導員、小学校教諭、特別支援学校教諭、市教育委員会指導主事、大学院生、大学教員であった。3名の話題提供を踏まえて、地域における関連機関との連携ツールである個別の支援計画や個別の教育支援計画の作成と活用のあり方について、活発な意見交換が行われた。

2. 第2回学習会

日時：平成30年12月15日（土）13時～15時

会場：上越教育大学第2講義棟104

テーマ：医療的ケアを必要とする子どもが主体的に学び生活する環境をいかに創り、いかにつなげていくか
(1)

講師：北村千章氏 新潟県立看護大学臨床看護学領域（小児看護学）

岩脇 勉氏 新潟県立上越特別支援学校教諭

花崎麻美氏 上越市在住

参加者 29名（県立看護大学教員、特別支援学校教員、療育センター、院生）

花崎麻美氏からは、高度な医療的ケアを要する児童を育てる保護者の学校教育への期待、家庭における育児の現状、岩脇勉氏からは、高度な医療的ケアを必要とする子どもが各教科等の学習をしていく上で必要となる、ICT機器の開発、教師間の連携の工夫、北村千章氏からは、医療現場における多職種連携に関する専門的知識の提供を受けた。

高度な医療的ケアを要する子どもの就学は、保護者の同伴が必要になっている。そのことが、親子の自立においてマイナスの影響を与えていることが先行研究において指摘されている。また、学校看護師も関与できない実態がある。その現状を打破する仕組みとして、北村氏が実施しているNPO法人親子の未来を支える会の実践を紹介していただいた。学校だけでは解決できない問題に対し、NPO法人との連携により解決を図っている実践であり、新たな連携に対する学習会参加者の関心が高まった。この学習会を契機として、次の第3回の学習会が開かれることとなった。

3. 第3回学習会

日時：2019年2月21日（木）16時～17時

会場：新潟県立上越特別支援学校自立活動室

テーマ：医療的ケアを必要とする子どもが主体的に学び生活する環境をいかに創り、いかにつなげていくか

(2) -人工呼吸器を必要とする児童生徒が学ぶ環境をつくるには？-

講師：北村 千章氏 新潟県立看護大学講師

参加者：上越特別支援学校教職員約40名 外部参加者29名

第2回目の学習会に参加した教員からの要望に基づき、学校の放課後に校内研修に位置付けて、講演会を実施した。講演後のアンケートにおいて、「医療職と学校の教員との連携には、どのような課題があると感じているか」、「医療的ケアの必要な幼児児童生徒とのかかわりから、あなたはどのような学びを得ているか」、「感想・意見」を記述してもらった。

4. 第4回学習会

日時：2019年3月23日（木）13時30分～15時30分

会場：上越教育大学 第2講義棟104

テーマ：医療的ケアを必要とする子どもが主体的に学び生活する環境をいかに創り、いかにつなげていくか

(3)

講師：林 信彦氏 NPO法人親子の未来を支える会代表 産婦人科医

参加者：34名

産婦人科医としての仕事の中で、出生前診断が普及すると障害を持つ子が生まれなくなり、より暮らしにくい社会になってしまうかもしれない、同時に、出生前診断を避けると治療によって防げるはずの障害や救える命を見逃してしまうというジレンマに課題意識を持ったことから、出生前診断の意義、胎児医療の倫理観、社会への働きかけ、障害への関わりについて多面的かつ組織的に働きかける必要があると考え、NPO法人親子の未来を支える会を設立した。患者家族、医師、看護師、エンジニアのまさしく多職種連携により親子を支える活動を行っている林先生から、連携についての考え方、動き方を講演していただいた。

第3回の学習会では、NPO法人「親子の未来を支える会」の北村先生をお迎えして、特別支援学校と学習会を共同開催した。内容は、人工呼吸器の管理等、特定行為以外の医療的ケアを必要とする子どもと周囲へのアプローチであった。学習会の感想として、

- ・学校で地域の医ケアを必要とする子どもの実態把握がなされていない、校内においても。
- ・医ケアについての知識を得ることが課題、安心してケア・支援にあたることのできる体制の構築が課題等が挙げられていた。

第3回学習会後の学校の変化として、学校長への相談、学部を越えて医ケアを必要とする生徒の学習環境を把握しようとする教員の行動がみられていた。連携は創っていくものであり、誰かが創ってくれるものではない。その子どもにかかわるすべての人が、子どもの成長を願う主体としての意識を持つこと・自覚することが連携を創ることになるのではないかと考え、第4回の学習会を計画・実施したが、その成果が表れていたのではないかと考えられた。

5. 第5回学習会

日時：2019年9月29日（日）13時30分～15時30分

会場：上越教育大学大講義室201

テーマ：特別な教育的ニーズのある子どもの自立と ICT - AI 社会を生きていく子どもたちの新たなキャリア教育を考えよう -

講師：藤澤義範氏 独立行政法人国立高等専門学校機構長野工業高等専門学校電子情報工学科・教授
岩脇 勉氏 新潟県立柏崎特別支援学校教諭
広瀬政晴氏 新潟県立上越特別支援学校高等部実習助手

参加者：33名

趣旨：

現在、学校では、発達障害や不登校等の他、日常的にたんの吸引や経管栄養等の医療的ケアを要する児童生徒の在籍も増加し子どもたちの教育的ニーズが多様化している。これら多様な特別の教育的ニーズを持つ児童生徒が、学校卒業後も生涯にわたって学び続け、地域の中で生活する主体となっていくためには、学級担任、養護教諭、学校看護師等の校内教職員間の連携の他、保健師・看護師、ICT支援員等医療・福祉、工学等の外部の専門家との連携に基づく教育が欠かせない。第4回目までは、「チーム医療」の蓄積を有する新潟県立看護大学や地域の多職種専門家との連携に基づく学習会の実践を通して、多職種連携による個別の教育支援計画作成や支援会議の方法・研修の開発に関わる検討を行ってきた。

その成果は、A 特別支援学校において、学習会における他領域の専門家との出会いを契機とし、高度な医療的ケアを要する児童生徒の学習環境の整備につなげるという動きに発展した。また、まずは、校内において高度な医療的ケアにかかわる基礎的な知識を得ることが必要であるとして、県立看護大学の北村千章氏を講師に 2019 年 4 月に校内研修が開かれた。これらの動きから、学習会の実施は、参加者の多職種協働に関わる意識に影響を与えたのではないかと考えられた。

以上、2018 年度は、高度の医療的ケア児の学習環境の整備として医療面から検討してきた。医療的ケア児や肢体不自由児は、その子どもの将来の生活を想定して卒業までに身に着けたい力を育成する上で工学等の専門家や ICT に関する専門性の高い教員等との継続的な連携が必要となることから、第5回目の学習会では、コミュニケーションに課題のある児童生徒及び医療的ケアを要する児童生徒の教育を開発していくために、ICT 専門家等との連携による学習支援教材作成に関わる学習会を行うこととした。

6. 第6回学習会

日時：令和2年2月8日（土）13時30分～15時

会場：上越教育大学人文棟113教室

テーマ：子育て支援における保健師の役割と多職種連携の必要性

講師：長澤由美氏 上越市健康福祉部すこやかなくらし包括支援センター保健師長

学校実習を通して、保健師と教員との協働の必要性を目の当たりにした院生を学習会の準備及び運営側に位置付けて開催した。

7. 第7回学習会

日時：令和2年2月16日（日）13時30分～15時

会場：上越教育大学201講義室

テーマ：バリアフリーな街づくりと教育 -バリアフリーマップアプリ「WheeLog!」の活用を通して-

講師：初鹿真樹氏 アコモケアサービス株式会社リハビリ部門主任、一般社団法人 WheeLog 運営メンバー（地域イベントアドバイザー）、作業療法士

作業療法士としての知識と経験を生かし、地域行政等との連携によるバリアフリーな街づくりの実践報告、大学生や高校生を対象にしたバリアフリーマップアプリを使った教育プログラムの実践報告をいただく

き、「バリアフリーな街づくりと教育」に関する知見を得ることを目的に開催した。

参加者は、車いす当事者、障害のあるお子さんを育てておられる保護者の方、親の会、学校関係者、市役所職員、社会福祉協議会職員であった。当事者本人の参加は今回が初めてであった。参加者からは、「共生社会、多様性を認め合うことを大切にしたいと思いつつも現場ではふれあう機会すら乏しいかもしれない」、「実際に、車いすユーザーの方と一緒に街歩きをしたい」「車いすの方がいつでも自分一人で行きたいところに行ける社会にしてほしい。上越のような雪がたくさん降るところだと家に閉じこもってしまう」「講師のお話はとても分かりやすかった」「自分も協力していきたい」というバリアフリーな街づくりに対する主体的な感想が寄せられた。

8. 第8回学習会

日時：令和2年2月18日(火)10時から12時

会場：人文棟113教室

内容：映画「道草」の鑑賞

趣旨：多職種連携による教育の実現において、見逃されがちなのが、当事者の思いである。私たちは、当事者のための教育を開発することが使命であるが、当事者の思い・意思を尊重するという態度を忘れがちになっていることはないだろうか、という考えのもと開催した。

参加者は、院生と教員であった。感想の一部を抜粋する。

- ・介助する人、される人という関係でなく、「同じ一人の人間として接する、尊重する」という姿勢が大切なのではないかと感じました。人間は、人の中で育つのだということも感じました。自分は教職に就いていますが、教師-生徒という関係の前に、同じ一人の人間として尊重しあいながら接するということが大切だと改めて思いました。
- ・家族・介護者のリアルな様子を知ることができました。そこへの支援をしたくなりました。高齢者に対しても同じですが、介護というものは専門家だけが行うというものではないのだと思いました。社会の皆で力を出し合いたいものです。
- ・上映に際し、「私たちは障害のある人の暮らしを知っているだろうか」という投げかけがあった。人の暮らしということの本質を問う内容だったと感じた。もう一度見たいと思った。
- ・教育の現場では、その時の課題や目の前の状況にどうしても目を向けてしまうという印象は強いが、子どもたちが大人になったときにどうなってほしいかという想いをもちながら、教育現場で行えるかわりをしていくことが基本となるのだと思えた映画であった。
- ・介助者の方々がおっしゃっている「自立」や映画の作り手の「自立」、ご家族の「自立」とそれぞれの「自立」の中身は何だろうかと考えていました。映画の最後になり、人とかわれること、外に出られること、いろいろな世代の人とかわれること、自分も他者も安心していられる場・状況を自らもつくれることなどなのかな？と思ったりしています。私自身がもつ「自立」のイメージを明確にして自分が持つまなざしを明確にして向き合いたいと思いました。